

■ 7. 総括

1) 事業テーマの推移について

2) 重点的に取り組むプログラムについて

- (1) 質の高いプログラム、新しく取り組むプログラムメニューの提供
- (2) 講師、コーディネーター、安全管理員の研修による資質向上
- (3) 多様な場所を活用したメニューの実施とボランティア体制の充実
- (4) 参加者への周知の工夫
- (5) 学社融合重点プログラム

3) 課題への取り組みについて

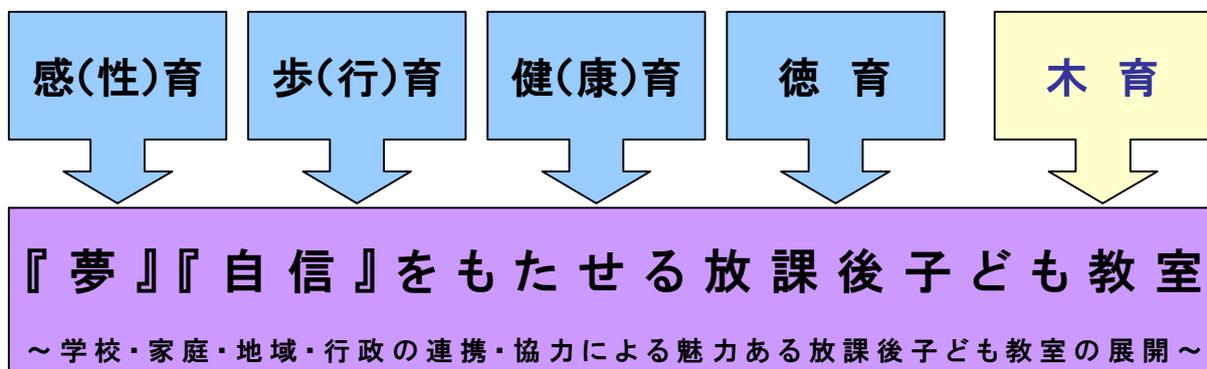
- ・ 昨年度からの課題と新たな課題への取り組み
- ・ 休日型放課後子ども教室 次年度への課題
- ・ 全国的な課題

1) 事業テーマの推移について

学校外における子どもたちの「自然体験」「社会体験」「ボランティア体験」は貴重な教育活動であり、このような体験活動を実施するには、「適切な場所」「指導者」「多様な活動プログラム」が必要であるが、学校教育だけではこのような環境を整えることができない。子どもたちが「いつでも・どこかで」「安全・安心に」活動できる環境を目指し放課後子ども教室を開設する。

平成19年度「土・日」「夏休み・冬休み」に、市内の文化・体育施設を開放・利用し、新たに「雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室」を開設し、「感(性)育」「歩(行)育」「健(康)育」「徳育」をテーマに延べ347教室を行い、計4,400人の子どもたちが参加した。また、約1500人の講師・コーディネーター・ボランティアスタッフの協力が得られた。

今年度は前年度の活動をベースに、さらに「木育」を加え、子どもたちの「思考力」「判断力」「表現力」を一層深めることができる体験活動の「場」を提供することで、子どもたちが『夢・自信』をもち、学校外における「生きる力」を育むプログラムを展開する。さらに学校・家庭・地域・行政の連携・協力による魅力ある放課後子ども教室の展開を目指している。



楽しくマジックショーの練習



親子でお料理づくり体験

2) 重点的に取り組むプログラムについて【活動計画書(1)～(5)の取組み】

(1) 質の高いプログラム、新しく取り組むプログラムメニューの提供

①自然体験プログラム

- ・水辺の生き物しらべ
- ・斐伊川源流探検

②親子体験プログラム

- ・親子お料理教室
- ・親子ふれあいキャンプ in 雲南
- ・親子夢未来コンサート

③アーティスト・アスリート本物体験プログラム

- ・伊藤国光監督陸上競技教室
- ・中村真衣選手の水泳教室
- ・NAGISA馬頭琴鑑賞教室
- ・室伏由香選手・信岡沙希重選手陸上競技教室

④特別に支援を要する子どもたちに対するプログラム

- ・講演&トークセッション感覚統合ってなに？
- ・うまはともだち

⑤古民家宿泊体験等地域資源を活かしたプログラム

- ・古民家宿泊体験
- ・トロッコ列車とガラス工房体験
- ・秋の遠足「巨大迷路とみかん狩りを楽しもう」
- ・炭焼き&山の幸パーティー

⑥楽しく学ぶ<体験><実験>学習プログラム

- ・夏休みチャレンジ学習教室
- ・科学の広場、木工教室
- ・ミーツザワールド



ふれあいキャンプで川流れを体験



牧場の仕事を体験



木を加工した椅子づくり

(2) 講師、コーディネーター、安全管理員の研修による資質向上

①全国的先進的指導者による研修会の開催

平成21年2月11日、木次経済文化会館チェリヴァホールで、～期待される放課後子ども教室(「夢」と「自信」をもたせる教室)のあり方～をテーマに『総合的な放課後子どもプラン推進シンポジウム』を開催した。香川大学生涯学習教育研究センター長・教授の清國祐二氏を講師にお招きし、「子どもの生活実態と放課後子ども教室」について基調講演をいただいた。後半のインタビュー・ダイアログでは、「平日型と休日型放課後子ども教室の役割と連携」をテーマに、コーディネーター、アドバイザー、登壇者、会場参加者による一問一答形式の意見交換が行われた。昨年度と比べて(休日型)放課後子ども教室に対する、出前教室の要望や、PTAなど関係機関との連携のあり方、来年度への期待の声を多く聞くことができたのは、アンケート回収率からも解るように(休日型)放課後子ども教室の事業が多くの人に認知された事によると感じた。

②コーディネーターのスキルアップ研修

夏休み特別教室として雲南市吉田町を拠点に開催した「忍者 鉄山師の町を走る」、雲南市三刀屋文化体育館アスパルで開催した「シアター運動会」において、地域コーディネーター、ボランティアスタッフ、体育文化施設専門職員を対象とした研修会を実施した。

スタッフが分かれて子どもたちのチームに加わり、現場体験しながら子ども達と触れ合うことで、「地域とのつながり」「学校の違う子どもたちに対する接し方」について研修した。

学校も年齢も違う子どもたちが初めて出会い、プログラムを通して交流する中で「新しい発見」や「友達づくり」は重要なキーワードで、それをサポートするボランティアスタッフの重要性を改めて感じた。



ボランティアスタッフの研修



総合的な放課後子どもプラン推進シンポジウム

11月18日、木次経済文化会館チェリヴァホールで、平成20年度雲南市放課後子ども教室スタッフ交流研修会（市教育委員会主催）が開催され、放課後子ども教室の取組みについて各教室同士が情報交換するとともに、それぞれが抱える課題について話し合った。

〔スタッフ交流研修会の内容〕

講義Ⅰ「放課後子ども教室の役割」

講師： 原田 尚氏（雲南市教育委員会地域教育コーディネーター）

講義Ⅱ「放課後子どもプランとまちづくり」

～浜田のまちの縁側の取組みから見てきたもの～

講師： 来栖真理氏（浜田のまちの縁側代表）

意見交換：「子どもの『生きる力』を育むために地域の大人にできること」

◆スタッフ交流研修会参加者の声

- ・ スタッフの確保が課題
- ・ 放課後児童クラブとの連携・共存が課題
- ・ 異年齢の子どもへの関わり方が難しい
- ・ スタッフ研修会を定期的で開催してほしい
- ・ 学校、保護者の理解と協力が必要 など



放課後子ども教室スタッフ研修会

(3) 多様な場所を活用したメニューの実施とボランティア体制の充実

①出前によるプログラムの実施

文化体育施設のない地域への教室展開や、地域資源の豊富な市内フィールドを利用した出前教室を市内各所で行った。雲南ブランド化プロジェクトの取組みの一環である、ふるさと雲南キョロキョロ探検パスポートと連携し、「キョロパスを使って雲南市をまわろう！」と題した夏休みプログラムでは、市営バスを利用したバスツアーを行った。

夏休み前に、申し込みが定員に達するほどの人気プログラムで、子どもたちが特に開放的な気分になる夏休みに、バスに乗って市内を探検できるイメージが子どもたちの興味を引きつけるキッカケとなり、地域の魅力を発見する機会となるのではないかと。

「ふるさと雲南キョロキョロ探検パスポート」とは？

夏休み期間、雲南市が小・中学生の学習・体験活動を支援する為に発行する市民バス利用券（料金300円）である。ふるさと雲南キョロキョロ探検パスポート（通称 キョロパス）を取得すると、夏休みの間、何度でも市民バスを利用でき、図書館での学習や史跡巡り等の体験活動に役立つパスポートである。

②島根大学の学生の協力

島根大学教育学部が学校教育を担う幅広い知見と教育的実践力をともなった教員を養成するための活動として実施している、「1000 時間体験学修プログラム」へ学生の協力を要請し、「夏休みチャレンジ学習教室」を行った。地域にとって学識も教養もあり、貴重な人材である大学生・高校生の指導スタッフとしての協力体制は、これからの放課後子ども教室の運営において重要な要素で、子どもたちにとっても年齢の近いお兄さん、お姉さんに勉強やスポーツを教えてもらう機会を提供する事は、

子どもたちの将来に夢や希望を持たせ、可能性を大きく伸ばすキッカケになるのではないかと。



キョロパスで雲南市内を探検



お菓子工房見学

(4) 参加者への周知の工夫

①携帯電話（QRバーコードを含む）の活用

毎月、市内全小・中学校の児童・生徒に配布している、うんなん元気っ子わくわく教室プログラムに、携帯電話QRバーコードを掲載し、うんなん元気っ子わくわく教室の紹介や教室の開催期日、内容などを定期的に配信している。近年の携帯電話普及に伴うプログラムの周知方法などに有効な手段であると考えられるが、プログラム配布での周知が浸透してきていることもあり、QRバーコードの登録会員は伸び悩んでいる。しかし、コストをかけずプログラム周知ができる手段として、有効であると考えられる。



②ホームページの作成

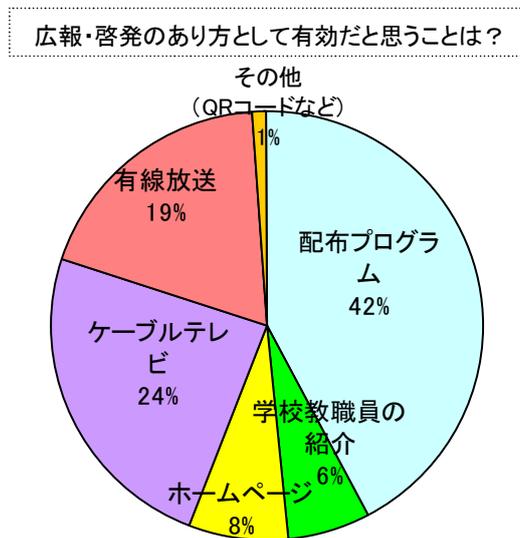
うんなん元気っ子わくわく教室のホームページを開設し、特別教室の紹介や実施した教室の様子を掲載し、定期的に更新している。教室のプログラムがダウンロードできるほか、人気教室ベスト10を紹介している。

■ホームページアドレス〔うんなん元気っ子わくわく教室〕

<http://user.kkm.ne.jp/bgkamo/>

③コールセンターの活用

うんなん元気っ子わくわく教室の配布プログラムや有線放送、ケーブルテレビでの広報・周知が、市内小・中学校で浸透しており、市内コールセンターの利用は、関係者の声から少ない事が予想されたため実施を見送った。



市内小学校教職員アンケート集計(平成21年1月)

(5) 学社融合重点プログラム

◆雲南市内の小・中学校で取組むキャリア教育推進プログラム「夢発見プログラム」との連携

夢発見プログラムとは？ <雲南市の目指すキャリア教育の方向性>

雲南市教育目標「ふるさとを愛し 心豊かでたくましく 未来を切り拓く 雲南市の人づくり」を目指し、雲南市の子どもたちが「ふるさと雲南」の地域資源（人・モノ・コト）や伝統文化にふれ、温かい人々との交流を通じて、将来への夢や希望、勤労観、職業観を発達段階に応じて身に付け「ふるさとで生きていこう」という気持ちを持てる学習プログラムを展開するもの。

①学校と連携したプログラムメニューの提供

〔平和と人権〕

長崎で被爆しながら医師として負傷者救護に奔走し、世界の平和を訴え続けた、故永井隆博士の業績を讃えて開催される永井隆平和賞、雲南市が主催するこの式典と連携した取組みとして、雲南市三刀屋文化体育館アスパルで開催された第18回永井隆平和賞において『命・未来・私たちの願い』をテーマとした音楽劇を発表した。

市内小学校から集まった子どもたちが「ららら・オペレッタ♪」のプログラムに参加し、夏休みから定期的に歌やダンスを練習しながら表現力をレベルアップし、当日は素晴らしい発表をした。技術の向上だけでなく、命の尊さや地域の歴史について学習する機会としてのプログラムを提供することができたと感じる。

〔世の中のしくみと勤労〕

「わら苺屋根」の古民家で宿泊し農業体験するプログラムでは、初めて挑戦する牛の乳搾りや畑仕事などの農作業に、子どもたちが目を輝かせて取組む姿勢が印象に残った。

また、夏休みに総合型地域スポーツクラブと連携して開催した夏祭りでは、子どもたちが実際に接客しながら販売体験をするなど貴重な経験を得ることができた。

子どもたちにいろいろな体験活動をさせることは、世の中のしくみを学び将来の希望や目標を持たせることに大きく影響してくると考えられる。本事業において、こうした体験の場や機会を提供していくことは地域で人材を育て活性化させる力となり、今後もプログラム提供が期待されていると考えられる。



ミュージカルの練習中



農作業体験でサツマイモを収穫

〔歴史と文化〕

大東町の古代鉄歌謡館で行った神楽教室は、鑿（胴長太鼓）・小太鼓・笛・銅拍子（手拍子・チャングワラ・合調子）を使った奏楽と、舞（四方舞）で表現される出雲神楽（海潮山王寺神楽）を地域の指導者が子どもたちに指導し「海潮温泉神楽の夕べ」において練習の成果を発表した。教室を指導するスタッフの皆さんは、子どもの頃から地域の伝統芸能に親しんできた人で、出雲神楽が本当に好きな人たちである。地域の子どもと大人が伝統芸能を通して交流し、地域の経験豊富な人材を活用することで、新しい人材を育てるプログラムとして提供することができた。

また、秋の遠足では大東町の佐世神社をウォーキングで訪れた。佐世神社のシイの巨木は、スサノオノミコトがヤマタノオロチを退治した後、川を下って海潮の須賀の地に向かう途中、白神山に登って休み、そこでシイの枝を頭にさして舞った時にシイの実が落ちて、成長したという伝説が残る巨木である。ヤマタノオロチ神話の息づく市内の歴史・文化を子どもたちに伝えていくプログラムが今後も必要とされていると感じた。

〔生活リズムと「食」〕

子どもたちが健やかに成長していくためには、適切な運動、調和のとれた食事、十分な休養・睡眠が大切といわれている。生活リズムを整える上で、食事は成長期の子どもたちにとって必要不可欠な基本的生活習慣であるが、最近の子どもたちは朝食を食べなかったり、偏った食事になりがちな傾向にある。こうした今日の子どもの基本的生活習慣の乱れが、学習意欲や体力、気力の低下の要因の一つとして指摘されている。

親子お料理教室は親子で楽しく料理を学びながら「食」に対する関心を深めることで、地域の食物や栄養などについての知識を深めることができるプログラムとして提供できた。

②教職員の希望するプログラムの導入

アンケート結果から見ても解るように教職員が期待するプログラムは、（平日型）放課後子ども教室や児童クラブと連携したプログラムであり、スポーツ少年団活動などで週末忙しい子どもたちを対象としたプログラムである。スポーツ少年団や部活動と連携し行った三瓶一泊研修や日独スポーツ少年団交流教室では、小学校高学年や中学生の参加が多くみられた。

また、近隣に文化体育施設がない市内小学校へのプログラムの出前教室を行った。こうした関係団体と連携した取組みが、今後の子ども教室の新しい展開として期待できる。



市内小学校でのスポーツ教室（出前教室）



秋の味覚をあげよう（秋の遠足）

3) 課題への取組みについて

昨年度からの課題と新たな課題への取組み

- ◆子ども達の魅力と意欲を引きつける教室の企画
 - ⇒質の高いプログラム、新しく取り組むプログラムメニューの提供
- ◆平日型の放課後子ども教室との役割分担を踏まえた更なる連携と役割の明確化
 - ⇒地域が子ども達を見守りながら育てる体制づくり
 - ⇒地域の総合的な学習として「生きる力」を育む教室の開催
 - ⇒あらたな児童クラブとの共同プログラムの展開
- ◆参加する子どもの固定化と新しい参加者の確保対策
 - ⇒総合型地域スポーツクラブ、スポーツ少年団等の活動との調整と連携
 - ⇒「身体教育医学研究所うんなん」と連携・協力したプログラムの展開
 - ⇒定期的にスポーツや芸術鑑賞のイベントを開催（多様な活動の場の提供）
- ◆学校教職員・保護者・学校支援地域本部・地域住民との共通理解
 - ⇒学校配置の「教育支援コーディネーター」と住民の立場で関わる
 - 「地域コーディネーター」の積極的な参画
 - ⇒学校や地域行事とタイアップした教室の開催、PTA参加型教室の開催
- ◆プログラムの周知徹底と普及対策
 - ⇒QRバーコード・ホームページの活用
- ◆ボランティアスタッフの確保と資質向上
 - ⇒コーディネーターの研修会実施、人材の発掘
- ◆継続的な教室開設への行政からの支援策
 - ⇒県、市と連携した協議会による来年度の調査研究モデル事業を目指す
- ◆全市内の立地条件への対応（交通手段の確保、出前教室の開催）
 - ⇒文化体育施設のない地域への出前教室の展開
- ◆特別に支援を要する子どもたちに対する教室
 - ⇒保護者を巻き込んだ教室メニューの実施、学校との連携

※参考 ～平日型放課後子ども教室の課題～

- 「スタッフの確保」「スタッフに対する研修の充実」「保護者との連携」
- 「放課後児童クラブとの連携・共存」「さまざまな子どもへのかかわり」

休日型放課後子ども教室 次年度への課題

- ◆継続的な教室開設への行政からの支援（安定的）
- ◆参加する子どもの固定化と新しい参加者の確保対策（部活動との連携）
- ◆ボランティアスタッフの確保とさらなる資質向上
- ◆全市内の立地条件への対応（交通手段の確保）
- ◆特別に支援を要する子どもたちに対する教室の充実
- ◆子どもの健全育成に果たすべき役割
（ノーテレビ・ノー携帯型ゲームのきっかけづくり）

全国的な課題

（全般的）

- ・ 予算措置が困難であり、事業の継続性に不安
- ・ 人材と場所の確保が困難
- ・ 子ども教室よりも放課後児童クラブの整備が優先

（地域的）

- ・ 特別な支援や障害のある子ども等の様々な児童への的確な対応が困難
- ・ 特に休日の放課後子ども教室に関わる関係者の確保と横の連携が難しい
- ・ 保護者の意識と学校の理解と全面的な協力が取れるか
- ・ 地域社会と家庭の連携強化を進める検討の場が立ち上がらない

■ 8. 関係者からの提言

～今後の放課後子ども教室のあり方について～

- 雲南市における休日型放課後子ども教室の活動について
田中 昭夫（島根県放課後子ども教室推進委員会委員長・島根大学教授）
- 雲南モデルの確立を
青山 巧（島根大学教育学部附属教育支援センター・准教授）
- 雲南市放課後子ども教室の新展開を展望して
清國 祐二（香川大学生涯学習教育研究センター長・教授）
- 「雲南市放課後子ども教室の取り組み」について
小久保 茂昭（中央教育審議会教育課程部会専門委員）
（前中央青少年団体連絡協議会理事）
- 「雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室」を振り返って
藤原 克朗（雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員）
- 島根県における放課後子どもプランについて～その現状と課題～
井上 孝弘（雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室運営委員・社会教育主事）
- 子どものために何ができるのか！
石田 誠（雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室運営委員）
- “放課後こども教室にPTAとして期待するもの”
大坂 耕（雲南市PTA連合会会長）
- 「放課後子ども教室」の現場から
加藤 勇（雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員・市体育関係団体代表）
- 豊かな感性と力強い子どもの成長を願って
高橋 洋子（雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室運営委員・教室指導者）
- 雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室の取り組みについて
錦織 瑞枝（ジャーナリスト）
- 雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室に講師として参加して
堀江 修二（雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室・教室指導者）
- 雲南市文化体育施設利用「放課後子ども教室」の親子料理教室について
榎本 矩子（雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室・教室指導者）

雲南市における休日型放課後子ども教室の活動について

田中 昭夫

子どもに豊かな放課後を

放課後における子どもたちの安心・安全を確保し、生活を豊かにするために、島根県においては、放課後子どもプランが作成されている（島根県・島根県教育委員会「子どもたちの心安らぐ放課後や休日のために 島根の放課後子どもプランについて」）、その活動が2年目の最終段階にある。島根県は、以前から共働きの家庭が多く、放課後の子どもの安心安全と豊かな放課後の保障が急務となっていた。就学前は、保育所や幼稚園での昼間の保育と延長保育、ファミリーサポートセンターなどに頼りながら両親が仕事を続けていける。しかし、就学後は、こうした放課後子どもプランによる放課後の生活の保障に頼ることになる。

いうまでもなく、放課後子ども教室は放課後や週末に子どもが体験や交流を行う場として開設される「子どもの居場所」である。一方、放課後児童クラブは、放課後児童健全育成事業に基づき、保護者が労働等により昼間家庭にいない小学3年生未満の児童に対して生活の場を提供するものである。

雲南市の放課後子どもプランの実施状況

雲南市は、島根県の生涯学習課及び青少年家庭課が作成した資料によれば、平成20年度において、放課後子ども教室が26教室と県内でも有数の開設を行っている。また、放課後児童クラブが8カ所開設されている。児童クラブは、開設日数が比較的多く（地域により多少異なる）、土日の開催日数が100日を超えるところも見受けられる。また、公民館単独あるいは、公民館と小学校での共同開催のケースが多く見受けられる。

休日型放課後子ども教室の実施

雲南市は、一般的な平日型放課後子ども教室に加え、「雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員会」（以下、実行委員会と略す。）のもとで、学校教育との連携を保ちつつ、休日型放課後子ども教室の活動が盛んに行われているが特色といえよう。

平成19年度は、6カ所の文化・体育施設を中心として、主に土日や長期休業中といった休日に、スポーツ、音楽、ミュージカル、ダンス、制作活動等延べ347教室、計4400人の参加があったという。また、約1500人のボランティアスタッフが協力して実施されている。

課題も多く存在するが、活動の成果として、活動場所の充実、活動を自ら選択する力の育成、広域の地域で特定の学校区内での活動ではなく、学校を超えた交流ができた、文化や体育など専門的プログラムを楽しみながら体験できたといった点が上げられている。

平成20年度は、19年度の活動への反省を踏まえ、幾つかの重点項目を挙げて活動が行われた。文部科学省は、20年5月を閉めきりとして「総合的な放課後対策推進のための調査研究」を公募しているが、放課後の効果的な活動プログラムを実施する取り組みに申請した実行委員会は、36.8という際だって高い最上位の評価を得ており、全国的に見ても注目されている取り組みといえよう。

具体的には、第1に、質の高いプログラムメニューを提供すること（自然体験プログラム、親子体験プログラム、アーティスト等本物体験プログラム、特別に支援を要する子どもたちに対するプログラム、古民家宿泊体験、楽しく学ぶ学習支援）であった。

第2に、体験を支える人々（講師・コーディネーター・安全管理員）の研修による質的向上を計ることであった。

第3に、多様な場所を活用したメニューの実施とボランティア体制の充実（出前によるプログラムの実施、島根大学学生への1000時間体験学修プログラムへの協力要請）であった。

第4に、参加者が固定化する等の反省を踏まえ、参加者への周知の工夫がなされた。

この4点に加え、学校教育・社会教育が融合した夢発見プログラム（総合的学習の時間を活用したキャリア教育推進プログラム）とプログラムメニューを共有化した学社融合プログラムが実施された。その中身は、学校と

連携したプログラムメニューの提供（平和と人権、世の中の仕組みと勤労、歴史と文化、生活リズムと「食」と教職員の希望するプログラムの導入であった。

課題と反省から見えてくるもの

平成20年度は、平成19年度の成果や課題に基づいて実行委員会の事業計画が策定されている。幾つかの課題がありそうである。

第1に、学校や教職員のこの休日型放課後子ども教室への理解不足、教職員の強い抵抗感があるという。すでに実施している推進策に加え、改善策として、各学校に配置されている地域支援コーディネーターを通じた連携支援や教職員が希望するプログラムの導入、学校が担う「総合的学習」を補完するプログラム導入するとある。資料からは、具体的な中身がうかがい知れないが、学校の平日型の放課後子どもプランに基づく活動との連携が求められることから、様々なチャンネルを通じて相互の信頼関係を構築することを通じて理解を得ていく必要があるだろう。

第2に、参加児童の固定化と高学年の参加が少ないという課題があるという。これについては、すでに実施中の児童や保護者へのアンケートを吟味して、実態とニーズを把握した対応が望まれる。とくに、高学年になるとクラブ活動、スポーツ少年団の活動や塾通いとの関係で参加しにくい状況もあると考えられる。たとえば、休日に試合や遠征が組まれる場合がある。

著者は、小学校児童における平日の放課後で大切なこととして、安全と安心、運動や遊び・文化活動、学習（宿題、読書）、適量のおやつ、夕食、睡眠と朝食の摂取、メディア接触の適正化を想定する。このことが実現するよう各学校でご指導されることを望む。一方、休日型の放課後子ども教室の活動については、休日という安息日に実施するという点も考慮しつつ、こどもにとって無理のない子どもの地域活動として展開していけるよう望むものである。

第3に、放課後子どもプランの認知度が低いという課題があるという。放課後子どもプランとして発足してまだ多くの時間が経過していない。そのことが影響している可能性がある。しかし、今後、今般の経済不況の影響から両親とも就業することによる共働き家庭増加の可能性はある。すでに、就学前では、松江市などで保育所の待機児童の増加があるという。そうなると、子どもの平日や休日における活動や居場所へのニーズが高まることも想定される。したがって、様々な媒体を用いて地域の方々へ放課後子どもプランの具体的内容についてお知らせしていく努力が求められていくと思われる。特に、有線テレビ放送などは、有効な媒体といえる。

休日型の放課後子ども教室活動に望むもの

①外遊びまたは身体を動かす遊びの奨励を

休日は、静かに身体を休め、平日の学習や労働という活動に備える日でもあるので過度の運動や遊びは安息の意味を失わせる。しかし、一般に幼児児童生徒の平日や休日の遊びについての調査を見ると活動場所以が室内で受け身的な遊びをしている場合が多い。冬期の本県の中山間地域は、雪の影響があり、遊びが室内化する可能性が高い。一時期のようなゲームへの耽溺という状況はやや緩和されていると思われるが、テレビの多チャンネル化・デジタル化、インターネットの普及に伴って、映像媒体への接触が高まっている。したがって、映像媒体への接触を適度に統制するという意味からも、休日にふさわしい運動遊び、外遊びのプログラムを実施していただきたい。いろいろな場所に行き、植物、動物の採集を行ったり、適度な長さを散歩することも考えられる。

②関わることの重要性

私たちの暮らしは、ややもすると受け身的で楽な暮らしとなっているのではないかと反省させられる。著者は、乳幼児期の子どもの発達が専門とするものであるが、乳幼児が周囲の環境と関わって遊ぶことが幼児の学びとして重要であると考えている。最近脳科学が盛んで特に前頭前野の機能の重要性が指摘されている。前頭前野の活動は、文章を音読したり、考えたり、計算をしたりといった人が物や文字や数字に「関わる」ことによって活性化されるという。そういう意味からすると、遊びを通じて「関わる」ことが幼児児童生徒の学びに重要であるといえる。

その意味で、実施されている科学の教室の工作活動、木工教室、親子料理教室、親子ふれあいキャンプ、水辺の生き物調べ、農業体験教室、販売体験教室といった活動は、子どもが具体的に工夫しながら「関わる」ものである。広い意味での物作りといえる。こうした「関わる」活動や体験をプログラムの中に組み込んでいただくことを期待する。

（島根県放課後子ども教室推進委員会委員長・島根大学教授）

雲南モデルの確立を

青山 巧

居（たい）場所づくり

子どもたちの目線で考えると、居場所には3つの目線の捉え方があるのではないだろうか。1つめは、本当は行きたくないが、親の都合で行かされている居（させられる）場所、2つめは何も考えずにそこに行っている（ただ）居（る）場所、3つめは、そこに行くと、とても楽しい居（たい）場所である。

行政的には、「保育に欠ける児童のための居場所」という目的もあるが、地域の宝である子どもたちが、安全で、安心して、楽しく、主体的に活動できる場としての居場所にしていくことが重要である。

雲南市において、平成19年度より取り組まれた「土日・長期休業中における文化体育施設を利用した放課後子ども教室」は、文字通り、安全で、安心して、楽しく、主体的に活動できる場としての居場所を目指しているものであった。

文化社会教育施設を活用する有効性

雲南市には、6つの文化社会教育施設があり、いずれも旧町村時代の地域の特性を生かして建てられたものである。これらの立派な施設を地域に開放し、子どもたちが積極的に使えるようにしていることは、以下の3点において有効性があると言える。

1. 多様なプログラムの提供
2. 本物とのふれあい
3. 異年齢交流の場

1については、施設の特徴が異なるので、それぞれの実績を生かした独自のプログラムを提供することで、子どもたちは必然的に多様な活動に参加することができる。また、プログラムを情報交換することで、PDCAサイクル機能が働き、よりよい活動へと修正することが可能である。

今後も、6つの施設間での連携を密にし、平日の放課後子ども教室へのプログラム提供などを試みていくことで、子どもたちにより充実した活動の場を提供することができるのではないだろうか。

2については、学校とは違い、広々とした施設、充実した設備で活動することで、モチベーションをあげていくことである。有名選手と同じコートでプレイする喜び、プロの演奏者と同じステージに立てる喜びは、子どもたちにとってステイタスとなり、活動意欲を大いに沸かしたさせるものである。基礎的な力を獲得する上でも活動環境の充実は効果的である。

3については、施設で活動する他の方とのふれあいである。多目的な活動ができる社会教育施設では、子どもたち以外の活動者もいる。ここで必然的にかかわることでコミュニケーション能力を高めることもできる。また、地域の方にとっても、子どもたちの元気な姿を間近に見ることは、地域の教育へ関心をもってもらったり、声掛けによる防犯活動につながったりしていくことなどにおいて効果的である。

活動の主役は子どもたち

子どもたちに活動プログラムを提供する時に心掛けたいことは、その活動を終えた時点で欲求の全部を満たすのではなく、「今度は自分でやってみたい」「帰ってから家族で楽しもう」「学校の友達とやってみたら楽しそうだな」という余韻をもたせ、主体的な活動へとつながっていくような支援をすることである。

そこが自分にとって一番居心地がいい場所にするのではなく、そこも自分にとって居たい場所にするのである。学校も楽しい、家も楽しい、地域で遊ぶのも楽しいと感じることができるようにするために、居場所はきっかけをつくる場所という位置づけになればいいのではないかと。

将棋の駒の並べ方を覚えた子どもが、他の人と対局をすることを求める。このまま居場所でも活動の場を与えることができるが、あえて公民館や高齢者との活動の場を促すことで、異年齢の方との交流へと発展させていく。料理教室で地域の素材をいかしたものを作れば、雲南市のどこに行けば手に入れることができるのか、

ほかにはないだろうかと目を輝かせて活動していく。神樂の楽しさに気付いた子どもが、自分がやるにはどうすればいいのか考え、行動する。自分の手で何かをなすことができる子どもたちを育むことをこの事業に期待したい。

ふるさとを愛し、地域の伝統文化を継承していく子どもたちに育てていくためには、まずはいい出会い、きっかけを作ることが大切である。それが、この事業では効果的にできると期待している。

学校との連携

新学習指導要領において、ゆとり教育の見直しが叫ばれ、その矢面となった総合的な学習の時間は削減された。一方で総授業時間数は増え、基礎基本の学力の定着を求められ、今まで以上に総合的な学習の準備の時間をとることが困難になってくると言われている。

島根県が推進しているふるさと教育において、雲南市でも育てたい子ども像を市内全学校で共通理解し、各学校では地域の実態に即し学校教育目標を設定し、総合的な学習の時間などで具現化を図ろうとしていると思うが、それを推進していくために十分な時間の確保ができないのである。

ふるさと教育で求めているものは、決して学校教育活動だけで培われるものではなく、むしろ学校できっかけを与えられ、地域で深めていくことが多い。何より、地域のことをよく知っているのは教員よりも、地域住民である。

特に、小学校においては、この放課後子ども教室が、学校での学習を補完・深化していく場となることを期待する。学校の多忙感を少しでも和らげ、子どもたちが健やかに成長していくための充実した教科指導、人間教育ができるためにも地域の協力を願う。

生涯スポーツを見据えた活動

体育施設での体験型スポーツ活動は、スポーツにおいて現在問題とされている、低年齢で特定の競技に偏った活動をすることで生じるスポーツ障害やバーンアウトシンドローム（燃え尽き症候群）、土日における終日の活動による疲弊感などを解決していく糸口になることを期待している。

幼児期から小学校低学年にかけて、たくさんの種目を経験することは、神経系の発達を促し、感覚運動の習得が効果的に行われるとされている。それに加え、体を動かす楽しさやそれぞれの種目の持つ運動特性を感じることができ、生涯スポーツの基盤を作る。また自分の特徴にあった種目を選択する機会を与えることともなり、自己決定ができる子どもを育てることにもつながっていく。

何より、適切な頻度（週1～2回）の活動は、子どもたち自身が「もっとやりたい」「もっと上手になりたい」という思いを抱き、自発的な活動へと発展していくであろう。

雲南市では加茂地区、大東地区に総合型地域スポーツクラブが組織され、積極的に活動されている実態がある。これらと連携していくことで指導者・ボランティアの確保や小学校高学年・中学生の参加希望への対処といった課題の解決にもつながるように思う。そして将来的には、雲南市全域での総合型地域スポーツクラブへと広がっていくことを期待したい。

島根大学との連携

島根大学教育学部では、将来教員になるためには、豊かな人間性と実践的な指導力が必要と考え、平成16年度より卒業要件として、

1000時間体験学修を課している。

具体的には、学校（幼稚園・小学校・中学校・高校）教育活動の支援、社会教育施設での支援、行政主催の週末活動の支援、各種団体の支援などを行っており、雲南市においても、これまでに幼稚園・小学校・中学校の学習支援・部活動支援、ラメールの活動支援などの実績がある。

これらの活動への参加者は、地元出身者もしくはその近辺出身者など、ごく一部の学生の参加にとどまっている。

社会文化体育施設での活動は、学校以外の子どもたちと直接かかわることで子ども理解を多面的にでき、かつ、充実した施設での活動という点において、学生にとって魅力的である。しかしながら、大学からの距離があることに加え、公共交通機関も不便ということから、活動に二の足を踏むことが予想される。

これを改善していくためには、

1. 交通手段の確保（大学への送迎, 交通費補助等）
2. 活動への広報（どれだけ魅力がある活動かを学生に発信）
3. 地元出身学生のネットワーク（核づくりと他の学生への広がり）

といったことが考えられる。

1については、経費もしくは人的負担、他のボランティアの方との兼ね合いなど、難しい面もあるが、2・3については、大学としても、附属教育支援センターを中心に協力をしていきたい。

最後に

「雲南市でないとできない」ものをつくりあげていくのではなく、「雲南市が発信源」となり、全国に広がり、最終的に「雲南モデル」として定着することを期待したい。

（島根大学教育学部附属教育支援センター・准教授）

雲南市放課後子ども教室の新展開を展望して

清國 祐二

◆2年目を終えた放課後子どもプラン

文部科学省と厚生労働省とが省庁の垣根を越えて子どもの育成に乗り出した放課後子どもプランも2年が経過した。放課後児童クラブが保護者の就労を支える取り組みとして草の根的に広がり、福祉・労働行政が支援するという経緯を辿ったのに対し、放課後子ども教室は体験の少なさから生じる子どもたちの問題を解決するために、地域のボランティアな力によって、豊かな体験活動を提供しようとするものである。ここ雲南市では、昨年度より文化体育施設利用放課後子ども教室として全国に類例のない取組を始め、確実に前進したといつてよい。

放課後子ども教室は基本的に地域の善意に支えられて実施されることもあり、子どもの体験不足を補完しようとする目的や、放課後の安心・安全を確保しようとするねらいは、それぞれの地域の熱意に委ねられることになる。わが子ではない「子どものために」という思いを引き出すことは、瞬間的にはできても、継続することは難しいのが現実である。それを市内の文化体育施設が連携を図り工夫を凝らして実施するという試みは、先導的、先駆的取り組みとして注目に値しよう。

◆放課後子ども教室と地域づくり

放課後子ども教室は第一義的に子どもに体験活動を提供することである。そこにはさまざまな経験や特技をもった地域の大人が関わり、地域の子とも直接関わることに特徴が認められる。子どもたちは、多くの大人と触れあうことにより、豊かな体験をすることができると同時に、地域社会や地域の人びとの暖かさを感じ、顔の見える地域を体感することができる。私たちが大人に成長したのちに郷土を思うとき、そこには親や祖父母や兄弟姉妹等の親族、友だちや先生、地域のおじさんやおばさん、よく遊んだ近所の神社、空き地、川や山、隠れ家があり、よき思い出と温もりを実感することができるのである。愛する郷土とは、決して絵はがきに収まっているような無機質な何かではなく、泥臭い人間味のする具体的なものである。

上記のことは、地域の大人にとっても心地よいことである。第一次産業のような共同体意識を自然に育むことのできなくなった現代社会では、いくら近所に住んでいるからといっても同じ目的に向かって協力する場面が少なくなった。集合住宅の共有スペースの清掃すら外注する時代である。そのような中で、「昔取った杵柄」を生かしながら、地域の人たちが協力し合って子どもたちの育成に関われるということは、今の時代、とても幸せなことではなからうか。このような取り組みが進んでいる地域は、地域の求心力として子どもや学校の存在があり、それらを支えようとする共通の目的が芽生え、多くの人びとの利害が一致することで豊かな地域づくりへと展開する可能性を有している。

地域の人びとが世代を超えて顔見知りになることは、結果的に豊かな地域づくりへと実を結ぶ。地域で挨拶が増えることによって不審者等の侵入の抑止力につながる。子どもも思春期以降の多感な時期に、少し脇道へ逸れそうになったときにも、よく知っている地域の大人がいれば言動も考えるだろう。忙しい社会、目的以外の副次的な効果をねらうことは歓迎されないかも知れない。しかし、だからこそ取り組んでおかなければならないこともあるように思う。

◆放課後子ども教室の発展に向けて

少し飛躍するが、西洋医学は患部そのものを治療することによって病気を治そうとするが、東洋医学の特に漢方やツボなどは人間の自然治癒力を高めることによって、身体自らが傷を癒そうと働きかけるのである。一見遠回りに見える取り組みが、実は地域のさまざまな課題へ迫っていくのかも知れない。地域づくりとは手のかかることであり、急がば回れの活動なのである。このように、放課後子ども教室とは、前向きな姿勢で取り組めば、多くの成果や副産物をもたらすのである。

放課後子ども教室は今後も雲南市をあげて取り組みが進められることを期待しているが、そのためには本事

業が子どもにとって、保護者にとって、地域にとって、有効でなければならない。有効性については上で触れたとおりであるので、ここでは逆説的ではあるが批判的意見を取り上げ、そこから見えてくる課題認識と目指すべき方向も示したい。

地域から寄せられている声に耳を傾けてみる。地域の善意で行われる放課後子ども教室が、保護者の甘えを誘引し、子育ての責任を外部委託させる危険性があるという指摘がある。制度や仕組みは利用する側のモラルとも関係し、危惧されるリスクは一部現実のものとなることも確かである。そうであれば、保護者への適切な啓発も同時に行っていく必要がある。子どもが家庭で過ごす時間が少なくなるが、それを補って余るほどの親子の会話が生まれれば、この事業がもたらす効果は大きい。活動支援をしてくださるボランティアへの感謝の気持ちが生まれ、挨拶につながるなどの成果があがれば、地域での関係づくりもでき、感謝のまちづくりにつながる。

地域の文化体育施設で行われる放課後の活動は、安心・安全は保障されても、子どもたちの囲い込みにつながり、逆に地域から引き離す結果になりかねない、という懸念である。本来、子どもたちは自らが地域を生活舞台として群れて遊びつつ、社会性を身につけることが望まれるという点で、管理された空間での活動は一定部分を欠落させてしまう恐れはある。このような声が高まるのであれば、それを地域ごとの取り組みへと発展させたい。私たちはいつまでも消費者ぶっっぱいられないのだ。

雲南市での取り組みが放課後子ども教室のあり方に一石を投じ、ひとつのうねりをつくりだすことを期待して止まない。

(香川大学生涯学習教育研究センター教授)

「雲南市放課後子ども教室の取り組み」について

小久保 茂昭

◆学校教育と社会教育の係わり

雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員会が文部科学省から委託された「総合的な放課後対策推進のための調査研究」事業への取り組みについて、青少年団体・社会教育団体に関係する者として、感想を述べてみます。

まずはプログラムに目を通させてもらいましたが、余りにも多彩な事業内容が用意されたことに驚きました。つまり、このように多彩な事業実施においては指導者自身は勿論のこと、事業実施を支えるボランティアスタッフないしサポーター的人材の確保が決して容易なことではないからです。さらに実行委員会の中核的なメンバーが今日的教育行政の流れをしっかりと把握し、従前の事業の反省・課題十分に検討して計画を立てて、実施したことがよく理解出来ました。

振り返って、私どもは長年にわたって社会教育と学校教育との間での相互補完機能を生かして、協力し合うことが豊かな教育を考える上で特に大切であり、中でも重要なのは、①人材の相互乗り入れ、②社会教育への学校施設の開放、③学校教育の中での社会教育施設の活用、④教員の様々な形でのボランティア活動への参画、等であると訴えてきました。この社会教育と学校教育との相互補完機能を進める言葉として“学社連携”が唱えられ、その推進が図られましたが「学校教育・主、社会教育・従」の形の補完関係が長年にわたって続くのみで、好ましい形での進展が見られなかったのが実情でした。

そして、平成7年に文部省(当時の)で開催された青少年教育施設の改善を検討する会議に於いて、“学社連携”を一步進めた“学社融合”が唱えられ、翌8年の生涯学習審議会が出した答申に学校教育と社会教育がそれぞれの役割分担を前提とした上で、そこから一步進め、学習の場や活動など両者の要素を部分的に重ね合わせながら一体となって子どもたちの教育に取り組んでいこうという考え方として、学社融合が盛り込まれました。学社連携・学社融合は言葉を代えて言うなら地域が学校に係わりを持つ、地域が学校を支えるということであり、地域の教育資源や人材を有効に活用してこそ教育が充実するということです。この流れは静かに進んで来ており第一は新学習指導要領に新たな学習領域として「総合的な学習の時間」が提示されたことです。第二はコミュニティスクールの指定と学校運営協議会の設置です。第三は学校支援地域本部の設置です。

本年度から始まった学校支援地域本部事業は学校運営協議会を支える組織となりそうですが、第一から第三までのものはいずれも地域との係わりが不可欠であり、第一と第二の報告会では地域との繋がりが強くなっていくところほど満足のゆく成果を得ており、今後への発展を期していることが報告されています。

◆地域の教育事業をまとめる形での展開

あらゆる分野で言えることですが、とかく新たなものを誕生させるとそこへ多くの力が注ぎ込まれ、従前のものがややないがしろにされがちです。地域が教育を支える点では、新たな施策・方策が打ち出されてもバラバラに取り組むのではなく、全体をまとめて、その中での一環として考えることが必要です。この点、雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員会は流れを十二分に把握した上で計画を立て、「総合的な放課後対策推進のための調査研究」事業に応募し、実施にあたっては、①学校教育との連携に重点 ②学校支援地域本部との連携・協力 ③平日型と休日型の子ども教室の役割の明確と連携・協力、等を事業の目的としてしっかりと押さえています。

背景・必要性においては ①地域社会による「学校支援」の必要 ②総合的な学習時間を核としたプログラムとの連携 ③「系統性」「継続性」のあるプログラムの展開等を確認しました。また、平成19年度の調査研究を通して「学校、保護者、他団体との理解・連携・協力の推進」等、5点ほど課題を挙げましたが、成果やこれらの課題を検討し、運営体制やプログラム企画から実施までの段階に活かし、より効果的な成果を得られるように配慮しました。その上で、(1)学校外における「生きる力」を育む学習プログラムの展開 (2)市内全中学校区に設置する「学校支援地域本部」との連携・協力 (3)「平日型放課後子ども教室」と「休日型放課後子

ども教室」の果たす役割の明確化、を目的として揚げ、指針として以下の6項目の挙げています。①子どもに「夢」と「自信」をもたらすプログラム(自主性・自立性を育む) ②文化と体育+学習=総合的な学習(「生きる力」を育む)の補充・体験・交流活動による、学校では出来ないプログラムの提供 ③魅力あるプログラムの実施(数から質への転換) ④体験格差の是正 ⑤「感(性)育」「歩(行)育」「健(康)育」「徳育」+「木育」 ⑥地域全体で子どもを育てる体制づくりと、いずれも今日の子ども育てに最も大事なことを適確に受け止められていることは高く評価されます。

◆さらなる充実・発展を目指して

事業の実施方法・内容を見ながら少し気になることを挙げてみます。

第一に昨年度の調査研究において課題の一つに挙げた他機関・団体等との連携・協力が挙げられています。ある目的を達成するために複数の機関・団体等が集まり、密接な協力関係を築こうとする際にネットワークという言葉を使用するが、ネットワークの日本的な考え方は組織と組織の繋がりで、しかし、アメリカ的なネットワークの意味はどちらかと言えば個対個の繋がりで、この日本的とアメリカ的なネットワークの中間的な捉え方をして取り組まないと組織と組織の連携・協力は想定するほど進まないのではないかと心配します。

第二に事業の周知、普及と参加児童の固定化への対応が課題として挙げられています。これについてはアンケート結果を見る限り、保護者や教職員への知名度は高いようなので、事業を知らない児童は少ないと考えてよいのでしょうか。とするならば、事業内容の面白さが十分伝わっていないことも考慮し、ウェブでの情報発信もこの分野に精通したボランティアの手を借りてより充実すべきでしょう。また、児童同士や保護者間の口コミもかなり有力な周知となることもあり、広報の方法も再検討すべきだと思います。

第三に重点的に取り組むプログラムの欄を(1)質の高いプログラム (2)講師、コーディネーター 学社融合プログラムと並んでおり、ある種の固さを感じさせます。この種の事業は“遊び”“楽しさ”に第一義の重要性があると思います。確かに(1)の⑥楽しく学ぶ<体験><実験>学習プログラムがあり、パンフレットを拝見する限り楽しい遊びが展開されていると思いますが、時には高度な知識・技術の提供に走り過ぎたり、学校教育的指導になって第二の学校化しないか心配になります。

第四に同じくプログラムの欄(3)に島根大学の学生の協力がありますが、大いに協力を得るべきだと思います。高齢者は児童にとってある種の“先生”であり年齢差の少ない大学生は兄弟で、接し方や会話の仕方・内容が異なって来ます。また、大学生にとっても学校での公式の教育実習とは大きく異なる、貴重な教育指導体験となるからです。この種の活動体験は青少年団体に所属してボランティアリーダーを務めるのと同じです。青少年団体に参加する大学生で年少者に対する活動支援や世話から、教育活動に目覚めて教員を目指す者も少なくないのです。

第五にプログラムの欄(5)の学社融合プログラムですが、第三の気になる点で固さを感じさせる要因の一つとして挙げましたが、総合的な学習の時間の成果を挙げている学校は地域の支えを上手に受けており、いろいろな人材確保にも繋がっています。積極的に行うべきだと思います。地域住民と教員とのコミュニケーションが活発になり、地域活動への教員が参画したり、地域住民が学習支援の機能を果たすところも出て来ています。

最後のまとめとして、雲南市文化体育施設利用の休日型放課後子ども教室が、再度の調査研究事業で組み込まれた中で、実行委員会関係者が投じた一石はとても大きな波紋となり、全国の教育・行政機関に反響することは確実視され、決め手がなく悩みの多い子どもの居場所づくりのモデル教室となることを期待致します。

さらに、社会教育の重要性を果たすべき役割に効果的な実践活動として展開されてきたことは、「学校教育と社会教育が主・従の形であってはならない」ということを実証されたことを社会教育関係者の一人として限らない喜びと感じました。

(中央教育審議会教育課程部会専門委員)
(前中央青少年団体連絡協議会理事)

「雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室」を振り返って

藤原 克朗

1. 地域での子どもたち

平成14年度に始まった完全学校5日制は、子どもを家庭に、地域社会に返し、併せて家庭の教育力、地域社会の教育力の向上を狙いとしていたはずですが。それから7年が経過した今、子どもたちの実態、家庭、地域社会の実情はどうであろうか？今やIT環境の激変がもたらしている子ども社会の変容は、ゲーム、メール、ネットと中にももって過ごすことが多いといった大変な様変わりである。また、極端な少子化社会であり、子どもたちが外で遊ぶ姿はほとんど目にすることがない。

2. 放課後とは

放課後とは………学校での活動から解放された時間帯。

更に、その子ども教室となるとその対象時間帯は、学校活動が行われる日は、学校で教育活動を終え、家庭に到着するまでの時間といえる。但し、いったん家庭に帰ってから再び家庭から外に出て再度家庭に帰るまでの時間も含めなければならない。……(平日型)

他に土・日・祝日・長期休業期間等……(休日型)と分けて考える。

(平日型)の教室と(休日型)の教室は全く(ほとんど)別のものとして取り組まなければならない。それが文化体育施設利用の放課後子ども教室であれば尚更である。

3. 居場所づくりの流れ

この事業は、平成16年度『子どもの居場所づくり活動・放課後子ども教室』……主に学校で活動……として始め、17年度からは『雲南市子ども居場所づくり』として全市内の児童を対象に、すべての小学校と多くの社会教育施設を利用して展開され、高い評価を受けている。

そして、平成19年度からは「総合的な放課後対策」になり「放課後子どもプラン推進事業」として、平日は全小学校区で学校や公民館などを教室にして展開している(平日型)。この事業が実施されない土・日・祝祭日・長期の夏休み・冬休みなどの休日を対象に、市内の文化体育施設を利用し放課後子どもプラン推進事業として『雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室』を2年間実施してきた(休日型)。

4. 活動諸団体の狙っているもの

これらの一連の事業の目的は、子どもたちが地域社会の中で、心豊かで健やかに育まれることであり、そのための環境づくりであると考えられる。

雲南市で児童を対象に活動している団体は、スポーツクラブ、スポーツ少年団を中心に野球、剣道、柔道、レスリング、サッカー、バレーボール、ソフトボール、バスケットボール、硬式テニス、バドミントン、卓球、空手、水泳等……体育系の活動　ピアノ教室、書道、バイオリン教室、音楽劇、筆曲、民謡等……文化系の活動と多岐に渡っている。

これらの団体は、ただその道の技術・知識の習得・伝達だけを狙いとしているのではない。それぞれの団体がそれぞれの活動を通じた独自の狙いを持っているはずである。『雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室』が事業目的としている「感性」「歩育」「健育」「徳育」と完全に一致しているわけではない。しかし少なくとも共有できる目的として『心豊かで、健やかに育まれている』ことを願い『そのための環境づくり』の一環を担おうとしていることには異論はないと考える。

5. 狙っている子ども像

こうした目的を達成(少なからず養える)ための『場づくり』はできていると思う。それは、児童を対象に活動している諸団体がつくりだしている場であり、文化体育施設利用放課後子ども教室が提供しているプログ

ラム実施の場である。

では何を共通の、誰でも素直に理解できる理念として掲げればいだろうか。それは、私見ではあるが……強く、明るく、優しい子と言えるのではないか。

1. 強い子……生活習慣がきちんとしつけられ、体も心も逞しい子。
2. 明るい子……明るい表情で自己表現ができ、人を受け入れ、人間関係をつくれる子。
3. 優しい子……自分を大切に、他人を同じように大切にできる子。

6. 参加できない子への対応

この雲南市にも『学校に行けない子』いわゆる不登校児童・生徒がかなり存在すると報告されている。この大部分の児童・生徒は人間関係が学校ではうまくつけれない子どもたちである。放課後子ども教室は、こうした子どもたちを対象にしていないかもしれないが、こうした子どもたちも同じように『タカラ』である。引きこもりがちな子を放置しないで、学校以外のこうした教室に引き出すのにも家庭、地域社会の教育力の活用が大切であると思う。家庭の、地域社会の教育力はそれこそ『触れ合い』からはじまり、その継続以外の何者でもない。家庭が子どもを地域社会に押し出し、その子どもを受け入れる地域社会があり、そこに『触れ合い』が生ずる手立て、媒体がなければならない。

また、家庭の事情で、地域的な事情でこうした教室に出られない子たちの実態把握、彼等への働きかけ、支援はほとんどできなかったことも、大きな課題である。

7. 小さなことの積み重ね

子をもつ保護者の意識、社会の大人の「子どもに対する」意識はどんなものだろうか。子どもを『大切にす』ことが「甘やかす」「なんでも言うことを聞き入れ、ゆるす」といった『甘え』に繋がり、『叱る』ことの大切さを忘れ、基本的な生活習慣の習得の欠如に繋がっているのではなからうか。受容はとても大切である。しかし、子育てに大切なことはそれがすべてではない。

私が学校勤務をし、生徒の心がすさび、荒れる学校の生徒指導担当であったとき、一人の母子家庭の中学生の家庭を訪ねたことがあった。母は夕方から仕事に出、朝帰り、二人の姉妹とはすれ違いの生活をしていた。私の突然の家庭訪問であったが、その子の接遇に驚かされた。履物がきちんとそろえられた清潔感のある玄関（入り口）で、きちんと座り手をつき、私の顔を見て挨拶し対応する姿の素晴らしさに、たいへんな爽快感を感じた。……あとで知ったことであったが、親子すれ違いの日常をカバーしている大きな方法は、お互いの意思疎通、行動報告等は備え付けの黒板に記載することでなされていた。

家庭での（小さな）生活習慣の積み重ねが（おはよう、ただ今、おやすみの声掛け、履物をそろえる……）一人の人間をしっかりと成長させることを痛感した。

8. 指導する者の研修

子どもたちに対応している地域社会での諸々の団体が、そこまで指導し、関係しているものだけれども、こうしたことを理解し、意識し、実行することがとても大切であると思う。

体育文化施設利用放課後子ども教室に関わっていただける地域の沢山の方（地域のありがたい人材）が集まる機会を設定し、共通理解したり、意見交換する研修の場の設定も大切なことの一つではなからうか。こうした人たちはすばらしい技の持ち主である。お互いに研修・研磨を重ねることでお持ちになっている技以外の人間の指導力が向上するのではなからうか。

9. 最後に

この事業は文部科学省の委託事業で、調査研究として取り組んで来たものである。平成20年度で終了するようであるが、2年間の積み上げ、実績を生かして、更なる課題の向上改善への取り組みを続け、(株)キラキラ雲南が主体となって是非とも継続していただきたい。

(雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員)

島根県における放課後子どもプランについて～その現状と課題～

井上 孝弘

1 はじめに

平成19年度から放課後子どもプラン推進事業がスタートし、2年目を終えようとしています。各市町村においては地域の実情に応じながら、留守家庭の児童に対し毎日の生活の場を提供する「放課後児童クラブ」に加え、地域の大人たちが異年齢の子どもたちに交流・体験の場を提供する「放課後子ども教室」の開設も進み、着実にその推進は図られています。

そこで、島根県における放課後子どもプランの基本理念をふまえながら、県内の推進の現状と課題について考えてみたいと思います。

2 放課後子ども教室及び放課後児童クラブの開設状況

放課後子どもプランは地域の実情に応じ、地域にある既存の組織や取り組みなどをうまく活用・連携しても進めていくことはできます。しかし、国庫補助事業である「放課後子ども教室推進事業（放課後子ども教室）」と「放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ）」という2大メニューを活用することは大きなポイントです。また、その推進状況の知るバロメーターにもなります。

放課後子ども教室については、19年度は125教室開設され、20年度は126教室開設されました。既存の取り組み等を利用して1つの校区に複数あった教室を整理統合した市町があったため教室数は微増となっています。しかし、開設小学校区数を全県の小学区数（19年度：257校区 20年度：252校区）との対比でみると4.2%（19年度）から4.8%（20年度）と大きく増加しています。

また、教室の平均年間実施日数については、89日（19年度実績）から104日（20年度申請時）と増加する予定ですので、内容的にも充実してきていることが推察されます。

さらに、教室の開催場所については、19年度（実績）は小学校以外の施設で実施されている割合が66%と圧倒的でしたが、20年度（申請時）は54%と減少し、小学校施設での開催（小学校以外の施設との併用も含む）が34%から46%へ増加する見込みです。学校の理解と学校との連携が着実に進んでいることも推察されます。

放課後児童クラブについては、158クラブ（19年度）から161クラブ（20年度）と増えており、校区との対比でみても6.2%から6.4%と着実に増加しています。

このように県内で放課後子ども教室も放課後児童クラブも着実に拡がりつつあり、地域の放課後子どもプランの推進の大きな役割を果たしています。したがって、両事業の未実施校区については、校区との対比でも2.7%（19年度）から2.3%（20年度）と減少しており、21年度（見込み）については2.1%まで減る予定です。

しかし、逆にみれば2.1%の小学校区では放課後子どもプランが推進されていない現状も浮かび上がってきます。未実施校区の中には、他の財源等を使いながら独自の放課後事業を展開している地域もあれば、学校支援地域本部事業等と連携しながら地域のボランティアで展開している地域などもあります。そのような実態の把握に努めていく必要もありますが、未実施校区への何らかの対応は考えていく必要があります。

また、両事業を展開していても地域のニーズ等は様々な上に変化していきます。それらを把握しそれらに応じた両事業等の展開が望まれるので、次に地域の実情を把握する場としての「検討の場」について考えてみたいと思います。

3 検討の場について

検討の場については、島根県の放課後子どもプランの基本理念の示す「子どもたちの心安らぐ放課後や休日のために～島根の放課後子どもプランについて～」の中でも特に大切にしているものです。

それぞれの地域（小学校区程度）の実情に応じた「放課後子どもプラン」を推進していく上で、地域の子ど

もたちにとって、「放課後や休日に安全で安心できる生活の場があるのか。」「異年齢など多様な関わりや群れて遊ぶ機会があるのか。」「様々な活動や体験の機会があるのか。」など、放課後や休日の地域での過ごし方の実態について地域（小学校区程度）で検討することは必要です。

検討するメンバーについても、地域社会総がかりで子どもの育ちを支える気運の醸成と仕組みづくりのためには、放課後子ども教室や放課後児童クラブの関係者だけでなく、行政関係者（教育委員会及び福祉部局）、学校関係者、社会教育関係者（公民館等）、児童福祉関係者、PTA関係者及びスポーツ少年団関係者や子ども会関係者など、放課後や休日に地域の子もたちと関わる多くの地域住民の参加が大切です。

さて、現在の状況ですが、市町村レベルでの検討の場の設置は15市町あり、着実に拡がりつつあります。また、未設置市町村についてもその必要性を感じているところは多く、21年度以降さらに拡がる見込みです。両事業を実施する・しないに関わらず地域の子もたちを地域全体で育むために必要な組織だと思っておりますので全市町村での設置を期待しています。

しかし、「子どもたちの心安らぐ放課後や休日のために～島根の放課後子どもプランについて～」の中ではすべての小学校区ごとに検討の場の設置をめざしていますが、現状では7市町で53校区とまだまだ低調です。

最適なメンバーによる定期的な検討の場の開催は、その地域（小学校区程度）の学校・家庭・地域社会のよりよい連携のベースになるものでもあると思います。

例えば、特別な支援が必要な子どもの様子やニーズ等を把握し障害のある子どもや不登校の子もたちもともに地域で活動できる取り組みにするためには、学校と家庭だけの連携ではなく、放課後や休日に子どもたちと関わる子ども教室や児童クラブ、そしてスポーツ少年団や子ども会、公民館などの関係者も相互に連携する必要があります。また、保護者が子ども教室や児童クラブなどを単に便利なサービスの享受と考えるのではなく、できるだけ積極的に地域の取り組みに関わっていく姿勢をもつためにも、検討の場にPTA関係者が参加するのはもちろんですが、検討の場を通して放課後や休日に子どもたちに関わる多くの関係者が「保護者と地域との接点」や「保護者の参画」を意識することも必要です。さらに、学校も地域のニーズや活動の内容に関心を持ち、家庭や地域とともに子どもを育てていくという思いをさらに強くするためにも、検討の場を通じた家庭・地域社会との連携強化が必要になります。

裏をかえせば、放課後子どもプランを取り巻く課題の中で、「様々な児童・生徒への的確な対応」「子どもの放課後や休日に関わる関係者の横の連携」「保護者の意識」「学校の理解と協力」といったことは、検討の場を充実させることで解決へと近付くことができるとも考えられます。

4 おわりに

この紙面の中では、放課後子ども教室と放課後児童クラブの開設と検討の場の設置状況から見えてくる現状と課題について考えてみましたが、放課後子どもプランを取り巻く課題はもっと多様です。ただ、上述した「検討の場の充実」は多くの課題解決の糸口になると思います。

最後に今一度「子どもたちの心安らぐ放課後や休日のために～島根の放課後子どもプランについて～」で述べられている島根県における放課後子どもプランのねらいについて考えてみたいと思います。ねらいの中の一節に

「放課後子どもプラン」は、地域の宝である子どもを地域全体で育むという基本理念に基づき、群れて遊ぶことが少なくゲームやテレビで過ごしがちな子どもに、地域の大人たちの力を結集して放課後や休日を健やかに過ごすことができる環境を保障し、地域での子どもの育ちを支えようとするものです。

この取り組みは、地域の教育力を再構築していく具体的なきっかけとなるものであり、できるだけ多くの地域住民が参画し、広く情報を共有することで、大きな推進力にしていくことが望まれます。

また、学校と地域社会との連携協力や信頼関係の構築に向けて、この取り組みを十分に活かしていく必要もあります。

さらに、保護者を便利なサービスの利用者の側に留めておくのではなく、例えば地域の様々な行事や活動とつながるきっかけを提供するなど、「放課後子どもプラン」を家庭の教育力の向上に結びつけていくという理念を持つことが重要です。（抜粋）

という記述があります。

放課後子どもプランとは、子どもたちにとってよりよい放課後や休日の環境を整えることだけではありません。地域の大人たちの力を結集し地域の子どもの育ちを支えていくことで、「地域の教育力の再構築」及び「学校と地域社会との連携協力や信頼関係の構築」、そして「家庭の教育力の向上」に結びつけていくことも大切であるということです。

今後もこのようなねらいを地域の多くの大人たちがしっかりと意識し、地域の多くの大人たちの参画を得ながら、より多くの地域で放課後子どもプランがよりよく推進されていくことを期待しています。

(雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室運営委員・社会教育主事)

子どものために何ができるのか！

石田 誠

◆ 教育支援コーディネーター

教育支援コーディネーター制度も間もなく3年が経過しますが、3年前に初めて入った頃と比べ少しずつその形も変わってきました。ただ、この制度の根幹である「子どものために何ができるのか」という思いは、常に不変のものとして私たちの頭の中にあり続け、それに基づき行動をしています。

◆ 「きよろパス」

そういった思いから、教育支援コーディネーターが発案したものに「きよろパス」という制度があります。昨年度の報告書に加藤氏も記載していましたが、これは夏休みの間、小中学生が市民バスを300円で乗り放題にできる制度のことで、パスポートの正式名称は「ふるさと雲南キョロキョロ探検パスポート」と言います。子ども達が夏休みを活動的に過ごして「ふるさと」に愛着を感じてほしいという気持ちを込めて制度化しました。

初めて実施した一昨年前の発行数は約160枚と期待したほど多くありませんでした。アンケートを見ると「親も市民バスに乗ったことがないので、子どもだけで乗せるのは不安」、「どこに行っているかわからない」、「行きたい所がない」などの意見が寄せられており、市民バスに乗る不安や乗車することに対する動機が持てないということが分かりました。

昨年は放課後子ども教室が開かれ夏休みに子ども達が参加できるメニューが大きく増えたこともあり、きよろパスは約400枚、一昨年の2倍以上の発行数となりました。このことから一昨年前に比べて子どもたちは確実に活動的になったと言えると思います。

今年は、昨年同様放課後子ども教室事業とタイアップをし、「きよろパス」を使う動機を強めるための企画を実施しました。夏休みに、子どもたちが地域の自然や人を体感できるバスツアーです。普段なかなか行く機会のない場所への市内めぐり、竹筒を使った米の炊飯体験や昆虫採集といった自然体験などを企画し、多くの子どもたちの参加があったほか、親子での参加も見受けられ、とても充実したツアーになったと思います。また、「放課後子ども教室事業」と同時に展開されている「放課後児童クラブ」の参加者も、このバスツアーを夏休みのプログラムとして取り入れていただき、多くの子どもたちがバスツアーに参加したことも、今年の大きな特徴であり、また成果と言えると思います。

「きよろパス」も、教育支援コーディネーターと同様、始めてから3年が経過し、かなり浸透してきました。今後は、今までやってきた企画を精査し、放課後子ども教室と連携を図りながら、充実したプログラムとすることはもちろん、「夏休みはきよろパスがある」ということが、子どもたちにとっても、大人たちにとっても「当たり前」となるように、さらなる周知を図っていくことが必要であると考えます。

◆ 「学校支援地域本部事業」

「子どものために何ができるか」という視点で雲南市教育委員会が今年度力を入れて取り組んだものに「学校支援地域本部事業」というものがあります。学校支援本部とは、一言で言えば「地域に作られた学校の応援団」です。これまで、各学校、地域で、地域の方々に様々な形で協力をいただきましたが、その取り組みをさらに発展させ、学校の「求める」支援と地域の「できる」支援をマッチングし、より効果的に学校支援を行うことを目的に今年度より始まった国の新しい事業です。雲南市教育委員会では、この事業の委託を受け、学校と地域を繋ぐ手助けをしていただく「地域コーディネーター」を、市内全小中学校に配置しました。

地域コーディネーターの主な役割として2つのことがあります。まず1つ目は、学校と地域の調整役ということです。学校の「こんなことをしてくれる人がいたら助かる」という思いと、地域の方の「自分はこんなことができる」という思いをうまく調整して、地域の方に学校活動に関わっていただき、子どもの教育活動をより充実したものにします。そして2つ目は、「人・もの・こと」情報の収集です。雲南市には、たくさんの地域資源（人・もの・こと）があります。その地域資源を子どもにもっと知ってもらい、もっと活用できるよう、

情報収集をしてデータベース化を図ります。

雲南市では、今年度の7月よりこの事業を開始し、約9ヶ月が経過しました。学校によって地域コーディネーターに求める内容は異なり、また地域コーディネーターがやってきたことも異なりますが、その1つに放課後子ども教室事業との関わりもあります。雲南市では市内全小学校で放課後子ども教室を展開していますが、そのスタッフを集めることは、限られた人員の中ではとても困難なことです。そこに地域住民である地域コーディネーターが入ることにより、新たなスタッフの掘り起こしを行うことが可能となりました。子どもや学校との関わりが一度薄れてしまうと、なかなかそれを元に戻すことは難しいことです。しかし、そこを「繋ぐ」人がいることで、一部の限られた人との関わりだけではなく、人から人へとつながりは拡がり、子どもは様々な大人に見守られ、教えられながら健やかに育つことができると思います。

◆ 今後の課題

来年度の課題となるのは「連携」であると思います。既に記載したとおり、「子どものために何ができるか」という視点で、各機関が様々な取り組みを行っています。無論、それはどれも素晴らしいもので、子どもの健全育成にとっても効果的なものであることは間違いありません。しかし、同じことを同じ時に行ったり、参加者の取り合いをしていると、十分な効果が得られないのではないのでしょうか。平日型の放課後子ども教室と土日・休暇型の放課後子ども教室、放課後子ども教室と放課後児童クラブ、放課後子ども教室と行政の行う社会教育活動等、狙いはそれぞれあるものの、事業の根幹である「子どものために」という部分はどれも同じだと思います。それぞれの良さを認めつつ、それぞれをつなぐことは、より発展的な事業となる可能性を十分に秘めていると思います。そのつなぎ役となるのが、我々行政職員の立場で学校現場に入った教育支援コーディネーターであったり、地域住民でありながら学校に入った地域コーディネーターであったり、また全体を見渡して事業を展開する行政としての役割であると考えます。「繋ぎ役」を活かし、子どもにとってよりよいものにしていくと、学校・地域・行政が一体となって考え実践していくことが今後必要ではないのでしょうか。

(雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室運営委員)

“放課後子ども教室にPTAとして期待するもの”

大坂 耕

放課後子ども教室で行われます取り組み（平日型・週末型）につきましては、子供達に多種多様な活動の場、体験の場を与えていただいておりますことに対し、深く感謝いたしております。

子供たちが成長する過程において、様々なスポーツ体験や文化体験を積むことは、非常に有益なことだと思います。そのことが豊かな発想の源にもなり、自分の将来の方向性を決める体験になるやもしれないからです。

多くの選択肢の中から、自分が本当に好きな活動、自分にあった活動に出会えるチャンスがあるこの事業は、とてもよい事業だと思います。

しかしながら、保護者の意識としましては、毎月配布されます「うんなん元気っ子わくわく教室」のプログラム等で、その存在についてはかなりの方が認識されていますが、参加意識としては、まだ低いのではないかと思います。

週末は、特に小学校の高学年から中学生までは、スポ少や部活の練習や試合があり、保護者もその送迎や様々な用事に追われているのが現状です。

時間的なゆとりの問題や、保護者が連れて行かないと子供たちは、参加ができないという物理的な問題、そしてわくわく教室に連れて行けば面倒を見てもらえるというような、預け場所的な思考、当事者意識の欠如の問題があるように思います。

そこで、PTAとしましては、参加当事者としての意識を持つために、放課後子ども教室の活動の中で、親子参加型の活動を増やしていただきたいと思います。

また、単Pで行っていますPTA事業とわくわく教室の活動と協力しあって、共同でできるものがあれば、共同で行ってみることもよいことかもしれません。子供たちの参加も見込まれ、保護者も当事者として働くことにもなります。

さらに、PTA事業と公民館事業とわくわく教室の活動とで共同で行うことができれば、地域の方々まで輪を広げた活動ができるかもしれません。その場合、場所は必ずしも雲南市の文化体育施設ではなく、地区公民館や学校でもよいのではないかと思います。

子供たちが、この「放課後子ども教室」を通して、より多くの大人や友達と交流を持つことが、大切なことだと思います。

各単Pや各地域が、今後どのような形でこの「放課後子ども教室」に関わっていくのかについては、それぞれの中で話し合われるべきだと思います。

各地域に根付いていく「放課後子ども教室」であることを、願っています。

(雲南市PTA連合会会長)

「放課後子ども教室」の現場から

加藤 勇

平成19年度、20年度の雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室で三刀屋文化体育館アスパルにて開催されている、「わくわく教室」に係わるようになって2年間の思いを述べさせていただきます。

私は雲南市体育指導委員協議会の一委員として軽スポーツができる人材として依頼を受けて、体育施設「アスパル」で「ニュースポーツで遊ぼう」や「わくわくファミリーウォーキング」、「カローリング大会」など担当しています。平成19年度には参加者が4～5名の時もあり寂しさを感じることもありましたが、平成20年度になって参加人数も多くなってきました。これも子どもたちの「ロコミ」と感謝しています。「時間を忘れ夢中になって、子ども同志仲間づくりをし、助け合いながら体を動かす」ことを基本に今後も進める考えであります。

今年度O小学校では公民館長と話し合い居場所づくりの一端として夏休み中に水泳教室が実施されました。最初は顔つけもできない児童が最終日には「顔つけ前に進むようになりました。二学期になってその児童は積極的に言葉をかけるようになった…」と聞きました。又学校では競技スポーツが主体で軽スポーツが体験していません。H小学校の感想文の中に「カローリングは初めてで最初わくわく、うきうきしていたが、試合結果は負けたけど楽しかった。」M小学校では「いろいろな軽スポーツが楽しくて、スポーツの楽しみが分かった」とか「雪がないのに雪合戦…本当に楽しかった」学年親子活動では「久しぶりに親の手を握って嬉しかった」中には「厳しく、優しく教えてくれてありがとう」など多くの声を聞いています。

最後になりますが軽スポーツを通して、厳しさの中にも楽しさを体験させ集団での助け合いの心を求めて、「夢」を持たせる活動を続けたく思っています。そしてこの事業が継続し大きな波となり発展することを祈ります。

(雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員・市体育関係団体代表)

豊かな感性と力強い子どもの成長を願って

高橋 洋子

放課後子ども教室が19年立ち上がり、及ばずながら私も運営委員の立場で協力する事となった。私達ハーブは、何を柱として進めて行くのか、いろいろ考えてみたがやはり「ハーブを通して自然の恵み、豊かな香りを少しずつ知ってもらい感性を高めてほしい」の目標を立ててみました。

ハーブ畑で苗を植え育てる、草とり、大きくなっていく姿、それに伴う作業、成長したのを刈り取り乾燥させる、ここまでもかなりの時間を要する。ハーブティもこの乾燥したハーブを何種類も分量を決めてお茶パックに詰め合わせる、子ども達もこうしてお茶になるのをびっくりしながら作業しハーブティを作ってくれた。そしてクラフト、いろいろのハーブの花、実を干して使う事に初めての体験に驚く事ばかりで、次の教室は何をするのか興味と期待の姿であった。印象に残っているのは、12月のクリスマスリース作り、珍しく父と子のグループが2組と1人の子どもが数人で、雰囲気も盛り上がり用意した小物を使ってリースにまとめていく行程、父親の方は静かに見守り時々アドバイスをする、「わかっている、ぼくやるからね」と目を輝かせ知恵をめぐらせ作っている、「いい感じに出来たね」の問いかけに「うん出来たよ」と満足な笑顔がこぼれる、「皆さん集まって記念写真を撮りましょう」に友達と写真をパチリ、ありがとう、ありがとうの解散に皆さんいい子に育てているねとエールを送った時間であった。

そして2月の木の実のブローチ作りは、女の子が14人、大人といっしょに作った。どんぐりを使ったブローチであるが自然の、そして身近にあるものを使った作品は大好評であり、小さな指で一生懸命作っている姿は感動的であった。

この教室で出会った子ども達の笑顔と安らぎ、そして楽しく過ごした事は、私達大人にも大いに学ばせていただいたと思っている。感性豊かな人となり、これからも力強く成長してくれている事を強く感じ、私達ハーブも引き続き何かの役に立てる事を願うものである。

(雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室運営委員・教室指導者)

雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室の取り組みについて

錦織 瑞枝

「うんなん元気っ子わくわく教室」の愛称どおり、子どもたちのわくわく感を誘う内容でさまざまな教室が開かれていると感じました。

スポーツ、伝統文化など各施設の特徴を生かした教室が開かれ、時には世界で活躍するスポーツ選手などを招いての教室もあり、子どもたちが「本物」に出会う貴重な機会にもなっていると思います。「ライスセンター見学とおむすびづくり」など、市内の動きに関連したタイムリーな教室もありました。出前教室も含め、教室は雲南市内の各地で開かれており、子どもたちの活動範囲が広がるような気がします。子どもたちが外で遊ばなくなったと言われていますが、教室が子どもたちの何か新しいものに挑戦したいという意欲を引き出し、参加することを通して積極性が育まれる、といったことも期待できると思いました。

カレンダーのついた毎月のパンフレットがわかりやすく楽しいものになっていると感じました。夏休みなど長期休業中のバリエーションの多彩さには目を見張りました。これらの企画は実行委員会の皆さんのアイデアでしょうか。子どもばかりでなく一般の大人も参加できる特別教室もあり、講師を含めさらに多くの人を巻き込む教室になっていくような気がします。

課題としては、二月にあったシンポジウム（総合的な放課後子どもプラン推進シンポジウム）でも出されていたように、居住地が教室開催場所から離れていて公共交通を利用できない子どもたちが参加するには、親など他者の協力が必要であること。「行きたいな」と思っても参加できない子どももいることでしょう。教室の内容によって時には（試験的にでも）、参加者のうちの希望者に送迎の付いた企画などは無理でしょうか。

(ジャーナリスト)

雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室に講師として参加して

堀江 修二

1 これからの日本人に求められること

1871年、世界的なトロイアの遺跡の発掘に成功したドイツ生まれのハインリッヒ・シュリーマンは明治に変わる3年前の1865年6月1日から7月4日までの一ヶ月間江戸に滞在し、当時の日本と日本人について彼独特の観察力で旅行記を書いています。その中で彼は日本人が世界中で最も識字率が高く、清潔な民族と書いています。

それより12年前の1854年、来航したペリーも日本と日本人を見て同じことを言っています。「もしこの民族にわれわれの文明を教えるとすぐに追いつくだろうと予言しています」。ペリーは来航した時のお土産として模型の蒸気機関車をもってきました。それを見た日本人は時速30kmで走る不思議な機関車を見て目を丸くしたそうです。

しかし、それから18年後の1872年、本物の機関車を新橋～横浜間に走らせアメリカや西欧の人々を驚かせています。そして85年後には世界一の戦艦大和や零戦などアメリカを凌ぐものをつくりました。これも江戸時代からの蓄積された学問の結果だといわれています。

でも、よるこんでばかりはおられません。汽車にしても、軍艦にしても、飛行機にしても実は日本人のオリジナルのものではありません。

今日、日本は経済力で世界第2位といわれていますが、経済力の基本になるもののほとんどが外国の特許から成り立ったものです。具体的には太陽光発電やコンピュータソフトその他もろもろのものが外国で発明されたものです。

ただ、日本人はその勤勉さと改良を得意とした技術で成功をおさめているのにすぎません。もちろん日本人にオリジナル性が皆無とは言えません。本年4人もの人がノーベル賞を取ったことでもそれを証明することができます。また万能細胞の開発とか青色ダイオードの発明など今後のノーベル賞候補に期待されるものもあります。

しかし、いずれにしても資源の乏しい日本国・日本人に求められていることはオリジナルな発明や開発のできる創造力豊かな国民を育てなければならないことではないかと思えます。そのためには創造力の豊かな子供たちの教育環境の構築が基本ではないかと考えられます。

2 子供の教育について私が感じること

現在の学校の教育内容について私はほとんど知りません。最近の新聞やテレビなどから学校では校内暴力とか、モンスターペアレントによる学校の先生に対する無謀な圧力などがあるようにうかがえます。たぶん田舎の学校ではそのようなことはないと思いますが。

資源の乏しい日本国にとって子供たちは宝であり、今後、我が国を豊かにする原動力であり、創造力の豊かな子供たちを育てるには学校教育が最重要課題ではないかと思っています。

今日、文部科学省主催の全国学力テストが新聞紙上で話題になっています。このテストがどのようなものか詳しくは分かりませんが、子供たちの創造力を豊かにするテストであったほしいものと思っています。

もしこのテストが詰め込み重点をおいたテストであれば創造力の豊かな子供たちは育ち難いと思います。わたくしの73年間の経験から詰め込み教育は絶対的なものでなく逆に創造力を減ずるものではないかと感じています。

少子化の現在、お母さんたちは子供の勉強に対してあまりにも近視眼的であり、また多くの学校の先生方も「もしかしたら」同じような考えではないでしょうか。

私の見解が間違っていれば申し訳ありませんが、今の小学校や中学校の教育は高等学校や大学入試のための予備校的な勉強のように思えてなりません。

発明王のエジソンにしても、相対性理論を確立したアインシュタインや遺伝学を確立したメンデルなど、彼

らの子供のころの伝記を読みますと学校では決して良い成績ではなかったようです。本当の子供の能力は今の高校、大学入試のような学力テストでは評価できるものではないと私は思っています。

人生で最も大切なことは人として教養を身につけることです。そして一生楽しく勉強（仕事）ができる環境を自ら創り出すことではないかと思っています。

自分で興味のある学問（仕事）は一生楽しく継続できるものです。しかし、興味ある勉強（仕事）を得るには人より何倍も、いや何十倍も努力しなければ見つけ出すことはできないと思います。人よりも何倍も努力した人が初めて一生を楽しく継続する仕事を得られるものと思っています。

少し道に外れたお話になってしまいましたが「雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室」は学校では勉強できない勉強ができ、それぞれ長い人生を経験した人々が師となって子供たちと一緒に楽しく勉強できる場として、将来子供たちの夢につながる教室ではないかと思っています。

3 私が教えていて思うこと

私は「雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室」に講師として参加し、地域の子供さんたちと一緒に飛行機づくりなどして遊ぶことができ心から感謝しています。

さて、私は今まで各地の学校や公民館などで工作教室を通して子供さんやお母さんたちと接してきました。その中で、お母さんたちには色々なタイプの方がいらっしゃることを発見しました。

まず、工作中に子供に鉄の使い方から定規の使い方まで「がみがみ」言うお母さん。これとは対照的に子どもが一生懸命工作中にじっと「黙って」見ているお母さん。子供と作業分担して「楽しく会話」しているお母さん。子供をほったらかして「自分が夢中」になっているお母さん、子供はお母さんの作るのをじっと見るだけです。

この四つのタイプの割合は別として、どの会場でも見受けられます。この内、子供にとってどのタイプのお母さんが良いのか私にはわかりません。

多分どのお母さんたちも、わが子が立派に育ってくれることを願ってのことと思います。

私がいつも思うことは、小学校や中学校の勉強が絶対的なものではないことです。近くにある高等学校に入学できる程度の学力が有れば十分です。小学校時代の成績が少し悪いぐらいで心配することはありません。

「一寸の虫にも五分の魂がある」ように、人間だれにも「五分の得意分野」があるはずで、子供たちが将来何になりたいのか、得意分野は何か、その目標に向かってサポートするのがお母さんやお父さん達の役目です。もちろん目標を達成するには人の何倍も努力する必要があります。「好きこそもの上手なり」の諺があるように得意分野に進めば子供は黙っていても勉強努力するものです。

4 私の子供のころ

私の子供のころは兄弟も多く勉強のことなど両親から何も言われずに育ちました。勉強の嫌いな私はいつもクラスではびりに近く、通知表の成績も極めて悪かったのです。

なぜ成績が悪かったのか、今思い出しますと予習や復習をしなかったこともあります。結局のところ、勉強が嫌いだったので先生のお話が理解できなかったことが真実のような気がします。

でも、私は子供のころから絵を描くことと理科が大好きで、この分野ではあまり人に負けるような気がしませんでした。

私が中学校2年生の時でした。どうしても月のクレーターが見たくて一生懸命望遠鏡を作りました。当時は戦後間もないころで天体望遠鏡などはどこにもありませんでした。寄せ集めのレンズをたくさん使って試行錯誤のうちにかく遠くがよく見える望遠鏡を作りあげました。夜、この望遠鏡で月を観測した結果、クレーターはもちろんのこと土星のリングまで見ることもできました。私はモノを発明するよろこびをこの時に獲得したように思います。

私は先述したように子供のころから画家になりたいと思っていましたが中学生のころ、当時はピカソなど前衛絵画の真ただ中で私は前衛の絵を理解することができず、画家の世界を諦めました。

そこで理科が好きだったので出雲産業高等学校の工業化学科に進みました。もちろん入学はラストの成績だったように思います。一年生の時はなかなか勉強が難しかったのですが高校の3年生のころ、勉強の面白さに目覚めました。

日本という国は大変良い国です。学校を出ていなくても自分が目標に向かって努力すればいろいろ自分の夢

を果たしてくれるところです。そして、子供のころ諦めていました絵の勉強も40歳のころから始めて、東京上野の都立美術館にも出品できるようになりました。人間は一生懸命勉強努力すると夢が叶えるものです。

(雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室・教室指導者)

雲南市文化体育施設利用「放課後子ども教室」の親子料理教室について

榎本 矩子

放課後子ども教室企画スタッフとして、また食育活動を事業の一環として関わる者として所感を述べていただきます。

「おはよう。」「こんにちは。」「元気だった?」「よろしくお願ひします。」はじめに1カ月ぶり(隔月)の挨拶をする度、少しずつ参加者の方(子ども)たちと距離も近くなり、お互い楽しくなってきました。初めての教室の時は、こんな感じではなかったけれど、まだ、皆さんの名前を覚えきれない悔しさはあるものの、同じものを作って食べる「仲間」になったことは、間違いありません。料理の魔法と教室の魔法がかかっているのでしょう。

親子クッキング教室の企画を担当して2年が経過し、顔馴染みの生徒さん親子に、今年度最後の締め括りとして、教室の感想を伺ってみました。

正直、子供たちの意見は殆ど聞こえず仕舞い。子供達は楽しいかどうか、又はやってみたいかどうか。案内をする時のキャッチコピーによるとのスタッフの見解もあり。参加者の意見を伺うと、「普段の日常に追われ、家庭と一緒にキッチンに立つことは難しい。気持はあっても時間と心に余裕が無い。」私自身も家に帰れば同様の立場。気持は良くわかる。親子クッキングはそんな親子のコミュニケーションの場となっているようにも感じます。ある方は教室の常連さん。「月1回のクッキングだけれど、参加する様になって進んでキッチンに立ち、お手伝いをしてくれるようになりました。」とのお話も伺いました。これら全ても料理教室の魔法。

親子クッキングの企画内容は、基本的に小学校低学年でも一緒に参加できる簡単なメニューが基本です。「果たしてこんな企画でいいのだろうか?」と思いながらも、少しでもこのような声を聞く事が出来たり、子ども一人でも参加したいという声を伺えば、何らかの喜びや、親子料理教室の成果があったのではないかと感じているところです。

また、校区外の人たちが参加されることによって、仲間や友達を増やしたり、コミュニケーションをとる機会になっていることも喜ばしい事だと感じています。また魔法。

親子料理教室に限らず、一緒にクッキングをしてびっくりするのはお母さんのこと。調理の基本を知らない。包丁の正しい持ち方と切り方を知らない。教わっていないのだろうか。これでは子どもにキッチンで包丁を持たせたりなど危なっかしくて余計に手が掛かるもの。体のどの部分に力を入れて、気持ちをいれて物を切るのかわからない。格好をみればすぐにわかる。心に余裕がなくなるのも無理はない。作ることに重点が置かれるからなのでしょうね。

料理も基本を知らずに作ることはできません。料理をする為の包丁は怖いもの。火は危ないもの。火傷は怖い。魚を触る事、捌くのが怖い。血をみるのも臭い匂いも嫌。しかし、子供達はこれらを上手につかう事で私たちは生きていけるのだということも知って欲しい。小学校中学年や高学年になってこれではいかなもののでしょうか。米の研ぎ方(洗い方)も知らない。卵の殻も割れない。信じられないが現状です。こんな子供たちに聞いてみたい。「お腹が空いたらどうするの?」そして、お母さんにも同じ質問をしてみたい。「とりあえず何かあるものを食べる。買ってくる。常時買い置きしておく。」なのだろうか。極端だが、お金がなかったら如何するのか。困るから時間に追われて働くのか。母は何のために存在するのか。

親子料理教室では、殆どが前にも述べたようにコミュニケーションの時間になっていることは言うまでもない。コミュニケーションが苦手な現代人に於いて、それはそれで良いことだとは思いますが、親子で料理をすることの素晴らしさはそれだけではない。私は事ある度に、「料理は魔法」と公言している。子育てにおいても、料理は一つの魔法だと感じているのです。

お互いを尊重しあい協力し助け合う。思考力、責任感、根気、創造力、意欲(自発、チャレンジ)、そして最後には達成感……。短い時間の間に、心身ともに健康でいるための、沢山の事を自然に学ぶことができる魔法なのです。私の経験からですが、思春期になれば親子の会話は減る傾向にあります。益々コミュニケーションが取りにくくなる年ごろでも、一緒にキッチンに立てば、子どもの方から話しかけてくれたり、心を開いて

くれることも沢山ありました。そして同じものを食べる。これもまた、魔法。

親子クッキングの主旨は何か。また親（大人）が伝えなければならない基本を知らずして子供に教え伝えていくことがあり得るのか。導き伝え、育むものは一体何なのか。

2年間携わり、正直沢山の疑問がわき上がってきているのも事実です。

食の安全が取り上げられる中、お店で食べものの買い方を教えるのか。添加物の表示内容や賞味期限の見方を教えることなのか。栄養学なのか。作物をつくり育てることを体験することなのか。現代において本当に必要な食育とは何か。食育の時代と言われてプロジェクトが取り組まれている中、私は本当に伝えるべき事はシンプルな事のように思うのです。

本来、食とは料理とは生きるための術であり、糧であり、指針であると思うのです。大きく広く、「社会や環境」とは言わず、先ずは子供たちに身近な社会や環境を正しく整えていくべきではないかと思っています。こういった意味に於いても、この放課後子ども教室のプログラムや取り組みは素晴らしいと思うと同時に、企画に関わるスタッフとして、母として何を一緒に取り組みながら楽しく充実した時間にしていくのか。内容の重要性が問われているのではないかとも思っております。

前の親子料理教室の感想に戻りますが、「来年度（今度）は何をしてみたいですか？」子供達は「お菓子作り。」と毎回のように答える。ここでも興味は空腹を満たす食事ではない。食の豊かさの象徴。夢のあるお菓子です。大人の方に聞いてみると、「この土地ならではの食事。」「基本の食事。ご飯の炊き方、お味噌汁、卵焼き、和えもの・・・子供の為と親の為になるもの。」私もそれは思うところ。実際は親の為でもあるのではないか。食のスタイルは各家庭で様々な様ですが、飽食の時代の飢えた食の部分の垣間見た瞬間でもありました。毎日必要なのはやっぱり、お米とその土地で生活するための食事が基本なのでしょうね。

私が幼少のころから味わった食への興味や不思議、喜びや感動、またノウハウを、そして魔法であることを、同じように子供たちに、そしてお母さん方に伝えたい。学校で習うような特別な知識などではない。今の教室の企画スタイルではどうしても時間内に無難に作って食べることに専念してしまいがち。それでも料理の魔法は少なからずかかっている。ご馳走や夢のあるお菓子の教室もたまにはいいでしょう。または興味のあることから深く入り込むこともいいでしょう。しかし、大切なことはまず、環境を整える。例えば、よく切れる包丁を準備する。クッキングに使う包丁は切れないし、刃が欠けている。見て見ぬふりをして子供たちに持たせていた。切れない包丁ほど余計に危ない。材料代よりそちらに予算を・・・包丁の研ぎ方も教えたい。包丁も種類が沢山ある。どうしたら危なくて、どうしたら便利な道具になるのか。誤って手を切ってしまったら自分の使い方が悪かったからだ。知ってほしい基本は沢山です。食べるものは簡単には出来ない。本物の味、自然の味、腐ったものの味を知っているのだろうか。そんなことを伝える料理教室の時間があってもいいのではないか。アナログがあるからデジタルが存在することを伝えなければ。

子どもの感性と能力は大きな可能性の宝箱。今この時にしか味わえない、経験出来ないことの中に食の存在も深くかかわっていると確信しています。得手不得手はあって当然。好き嫌いもあって当然。個性をいかに尊重しながら、社会性と人間力をいかに養っていくべきなのか。また、私たち大人がこの社会の宝である子供たちとどのように関わり、どのように子供たちの指針となってゆくべきなのか。放課後子ども教室のスタッフとして今一度この所感をもって考える必要があると思っております。

言葉にすれば、こんな感じ。「あの時、子供の時こうだったなあ。前にこんなことがあったから・・・。懐かしいな。ホッとするな。幸せだな。元気になれるな。他人や自分の子供にも伝えたい大切なことだな。」

沢山の経験や思いが後世を育む。今わからなくても何かのきっかけや、ある時期、大人になった時に自然に感じてくるような。そんな経験が日常の食の魔法から学びとってもらえたら。子供達には食を通して経験豊富な魔法使いになってもらいたい。そう願い、少しでも来年度の企画のお役に立てればと思っています。

最後になりましたが、親子料理教室に限らず、企画スタッフの皆様のご尽力あつてのプログラムだと感謝すると共に、今後一層放課後子ども教室が発展されることを願っております。

(雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室・教室指導者)

おわりに

雲南市においては、平成17年度より市内全小中学校において子どもの居場所づくり事業を展開してきました。17年度より実施したこの事業も本年で4年目を迎えます。当初見守り活動が中心だったこの活動も、地域によっては、様々なプログラムを準備しておこなっておられるところも出てきました。また、保護者と地域の方の交流へと発展した地域もあります。さらには、見守り隊を結成し地域の子どもの安心・安全を見守っていただいている地域もあります。このように、地域の特色を活かしながら居場所が発展していったことをまさに地域の教育力の向上の大きな表れではないかと感じています。

このような中で、長期の休業中・休日については居場所がなかなか開設されにくい状況にありました。そこで平成19年度より、「雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員会」において週末・長期休業中に居場所として放課後子ども教室を開設され、様々なプログラムメニューを提供されました。このようなプログラムを実施していただいたことは、子どもたちの放課後、長期休業中の活動にとって非常に大きなことであったと思います。

本プログラムが始まった1年目は、周知についてなかなか学校との協力体制がとれていない部分もありましたが、徐々に活動も浸透していき、たくさん子どもたちが「雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員会」のもつスポーツや文化、芸術等本物のプログラムを体験することができました。何よりも、専門的なプログラムを体験することは、普段の平日の居場所では体験できないことであり、子どもたちにとっても生きる力を育むうえで重要な体験となったことと思います。

2年目の平成20年度には、1年目の反省をいかし、保護者や学校への周知の方法もインターネットやチラシ等を活用し、さらに雲南市が平成20年度より配置した「地域コーディネーター」との連携も図りながら周知されたと思います。また、プログラムについても雲南市教育委員会が作成した『「夢」発見プログラム』の4つの柱「平和と人権」「世の中のしくみと勤労」「歴史と文化」「生活リズムと『食』」とも連動し、社会教育的な側面からのプログラムとメニューを考えてもらい、実施してもらいました。学校教育においても夢発見プログラムをおこない、社会教育においてもその考え方に即したメニューを提供していただいたことは、まさに学社が連携・融合した子ども育成であると感じます。

また、2月には、「総合的な放課後子どもプラン推進シンポジウム」が開催されました。その中においても様々なキーワードが出ました。「多様化と個性の両立を図る。」「多様な人材との関わり」「大人が元気になりがんばる姿を子どもに見せることで、その思いが子どもに伝わる。」「大人が雲南の良さを子どもに伝えていくことの必要性がある。」「PTAとの連携を図りながら親子で活動できるプログラムメニューの開発」などパネリストから発言がありました。

また、最後のまとめでは、雲南市において学力調査の結果を見ると、総合的な学習の時間が楽しいといっている子ども達が、全国よりも20ポイント多かったです。これは素晴らしいことであると思います。総合的な学習の時間が楽しいというのは、学校の先生方と地域の皆さんとの力で授業が進められている証拠であると考えます。自己肯定感、地域の肯定感といったこともふるさと教育や夢発見プログラム等によって子どもたちが地域に誇りを持っているということであると思います。このような週末型の放課後子ども教室においても地域の方との関わりを持つ機会を提供してもらっているということは、何らかの形で子どもたちの心に働きかけをしているということであると思います。放課後や休日・長期休業中についても子どもが時間を惜しんで遊んでいる姿を見ると今後も放課後子ども教室と休日・長期休業中の放課後子ども教室が連携し継続していくことの重要性を感じます。また、本当に子どもを見守りながら、一方で育てていくということが大人の責任でもあり、親の責任でもあると思います。

以上述べたことを含め、今後、放課後子ども教室を推進していくうえで、「雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員会」から提供していただいたプログラムは、教育委員会の行う事業等と有効に連携し目標を共有しおこなっていくことが大切になってくると思います。また、青少年教育関係団体やスポーツ少年団とより連携を図り、放課後の子どもたちの選択できるメニューに幅を持たせることが必要になると考えます。そして、子どもたちが異学年同士での交流や学校以外の友達との交流やたくさん大人達との交流を通して社会教育においても「知、徳、体」をバランスよく習得していくことになると思います。

今後とも引き続いてこのような幅広い活動を「雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室実行委員会」がコーディネート役の中心となって推進していただくことを期待し、まとめとさせていただきます。

雲南市文化体育施設利用放課後子ども教室運営委員
地域教育コーディネーター

原 田 尚